

深底

アイ

ガープがアガレスを、ピケロと呼ぶようになった。唐突に、何の前触れもなく。

いや、二人の間では何かしらの変化が確かにあって、呼び名を変えることにしたのである。だから二人にとっては唐突でも何でもなく、積み重ねてきた時間の上に成り立つ至極順当な変化なのかもしれない。我々が、それを知らないだけで。

何でもないように名前を呼ぶガープと、それに何でもないように応えるアガレス。いつもと変わらない二人。

そしてその二人を、アスモデウスは心底羨ましく思った。

「しりとりがしたい?」

放課後。いつものように何の遊びをしようかと問われたアスモデウスは、入間にそんな提案をした。

「はい。今日はあほクララもおりませんので、ちゃんと楽しめるか」と

昔一度三人でしりとりをしたことはあるのだが、クララが意味のわからない造語を連発するせいでゲームにならず、それから暗黙の了解としてしりとりをすることはなくなつた。でもアスモデウスと二人なら、問題なく楽しめるだろう。そう考えた入間は、深く考えることもなく頷いた。

「わかった。やろうか」

「では僭越ながら私から。……魔ファイア」

「あ、あ、……アイス」

甘いものが好きな入間らしい返しだ。微笑ましく思いながら、アスモデウスはノータイムで次の言葉を選ぶ。

「スモア」

「ああ、あれも美味しかったよね。炙った魔シュマロとチョコがとろけて、クッキーも美味しくて」

「またやりましょう。アズの炎は、入間様のためにあるのですから」

バレンタインの日、アスモデウスが入間に用意した菓子だ。魔シュマロとチョコをクッキーで挟んで、火で炙る。そんな一手間かかる菓子も、アスモデウスの手には掛ければ瞬きをする間に出来上がってしまう。誰もが欲しがる良質な炎。それを他でもない人間のために使えることは、アスモデウスにとってこれ以上ない喜びだった。

「うん！ って、あれ？ また「あ」かあ……、うーん……あ、飴！」

また甘い菓子の名前。眉を寄せて悩んでいた困り顔が一瞬でパツと明るく綻ぶところは可愛らしくて、見ていて飽きない。

「——では、救世主^{メシア}で」

「早いよーっ……、ていうかまた「あ」って……アズくん絶対「あ責め」してるでしょ！」

「何のことでしょう？」

惚けてみせるが、もちろんわかってやっていることである。でもアスモデウスには必要なことだった。だからなりふり構ってなどいられない。どんな姑息な、卑怯な手段に訴えても——アスモデウスはどうしても、人間に名前を呼んでもらいたかったから。

アガレスとガーブ。あの二人の関係が、アスモデウスにはとても眩しく、羨ましかった。

しかし出会った頃に自分から「アズとお呼びください」と言ってしまった手前、やっぱりアリスと呼んでくださいと求めるのもおかしい気がするし、優しく「アズくん」と呼ばれるのも気に入っている。

どうしたものかと頭を捻り、辿り着いた答えが「しりとり」だった。「あ」で終わる言葉を繰り出し続けければ、いずれネタ切れになった人間が「アリス」と言ってくれるかもしれない。アスモデウスはその可能性に賭けることにした。

「あ、あ……」

思っていた以上に人間は手強かった。「あ」で終わる言葉も多いわけではない。だが、この目的のためだけに「あ」で終わる言葉を徹夜で頭に叩き込んできたアスモデウスに人間が勝てるわけもなく、ついにネタ切れになったらしい人間は、もう随分長いことうんうん唸りながら言葉を探しているようだった。

「人間様」

「待って、もうちょっとで思い付きそう——」

頭を抱える人間の手を取り、期待を込めてぎゅっと握り締める。

（どうか私の名前を、）

目を瞑って、指を組む。まるで祈りを捧げているような切実な表情は、人間の目にどう映ったのだろうか。

「人間様、続きを」

「——アズくん」

「はい？」

「だから、「アズくん」。「ん」で終わっちゃったから僕の負けだね。しりとりはもうおしまい」

こうしてあまりにも呆気なくゲームは終わってしまった。名前を呼んでもらうという目的は果たされることなく、このまま別々の帰路につかなければならない。

「待ってくださいっ、もう一度っ」

「アリス」

聞き間違いだろうか。しかし確かに、人間はアスモデウスをしっかりと見据えながら口を開き、その名前を呼んでいる。

「アリス」

女性のような名前のことを、ずっと疎ましく思っていたはずなのに。目の前の空色の髪の少年にそう呼ばれるのはただただ心地良い。

「アリスは僕に、名前で呼んでほしかったんだね」

もうゲームは終わっている。ゲームの中では呼んでももらえなかった名前を、人間は確かめるように何度も呼んでいて。

ああ、まるで夢みたいだ。

「ごめんね、勝手に終わらせて。こんなゲームの中で呼ぶんじやなくて、ちゃんと君の名前を呼びたかったから」

「……ありがとうございます。ずっと、貴方にその名を呼んでほしかった」

睫毛を伏せて感慨に浸る。そんなアスモデウスを見て、人間は珍しく微笑をした。

「僕も……君の名前が呼びたかったんだ。ずっと、アリスって呼んでみたかった」

出会った頃からずっとそう呼びたかった。そういう意味で言ったのだと、アスモデウスが気付くことはないだろう。そう思うと少しだけ寂しい。でもそれを伝えるのは野暮というものだろう。これからの二人の前には、そんなことは些細な問題である。

「今はまだ恥ずかしいから、普段はアズくんって呼んじゃうと思うけど。でもいつかきつと、みんなの前でも、二人きりのときも……アリスって呼べるようになると良いな」

目を瞑れば目蓋に浮かぶ光景。成長した未来の人間が、優しく微笑んでいる姿を、アスモデウスは確かに見たのだった。